
バツゲーム(MMR Ver.)

MMR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バツゲーム (MMR Ver.)

【コード】

N0388H

【作者名】

MMR

【あらすじ】

女子にちよっかいを出す遊びを男子がしている。その中にわたしの好きな人がいて…いつ彼に回ってきてしまうだろう。

今のわたしは、とつてもゆううつ。

だって、好きな人がムリヤリ嫌がることをさせられるのを見る目がくるなんて、考えたくもないじゃない？

「よし、じゃあはじめろぞ」

「いつものメンバー集まれー」

「今日は何で決めるんだ？」

はあ、また始まった。

わたしはある1人のかけ声で教室の角に群がってくる男子を見ながらため息をついた。

その中心にいるのはムードメーカーというのにピッタリの人。ただ、それは男子のみの話。女子にとっては、すこぶる評判が悪い。

その原因は、これからはじまるゲームにある。

「よし、今日の負けはおまえだな！そうだな…じゃあ、次に教室に入ってくる女子にデートの申し込み！」

…こんなことを言っている人が、女子に好かれるわけないよね。運悪くこのタイミングで教室に入ってきてしまった子は、突然のことに顔を赤くしている。でもすぐ後ろで口笛ではやしたてている男子を見て、

「バツカじゃないの？」

と言って足を進めた。

「あーあ、ふられてやんの」

こんなことが、毎日のように繰り返されている。

わたしは毎回その被害者の女子に同情しながらも、いつ自分がそ

の対象になるかと心配になっていた。

ましてや、それが…

わたしはそのゲーム、通称そのままだけどバツゲームと言われているものがひと通り終わって解散しかかっている男子の方を見る。

そのムードメーカーの隣で話している人物に、目が行っていた。

何か話している…でも聞こえない。

この2人は一緒にいることが多い。たぶん、親友つてやつだ。わたしとしてはなんであんな奴と親友なんだろう、なんて思ったりする。

…だって、わたしの好きな男子だから。

気が弱いけど、優しくて…だから、このバツゲームにも参加しなくちゃいけないって思ってるんだ。

好きになった理由がそのままバツゲームの参加理由になっているなんて、皮肉かも…

もし彼が負けて女子に何かするなんてことになったら…と考えると、彼も辛いだろうし私も辛い。

神さま、そんなことになりませんように。

今の私にはそう祈ることしかできなかつた。

ドアを開けると、頬をなでる風が出迎えてくる。

昼休みにだけ開放される屋上…まるでお風呂の中に入っているような感覚のする日差しが心地良くて、ここのところわたしは毎日必ず、来るようにしている。

ただ、もうやめようかなと思う時もある。

「よーし、じゃあはじめろぞー」

…なんで、こんな場所に来てまで。

リフレッシュしようとしている時にまで彼らにかまってはもらえない。わたしは無視して、遠くの風景を眺めていた。

だけど…その時はついやってきてしまった。

「あ、あのさー」

わたしの背中に向かつて呼ぶ声がして、振り返る。
すると目の前には、彼がいた。

好きな、人が…

神さまへの祈りは、どうやら通じていなかったみたい。
それどころか、よりによってわたしだなんて。

でも、呼ばれておいて何も言わないわけにもいかない。

「な、なに…？」

「ずっと、好きでした。よければ…付き合ってください」

…なんでそんなこと言うの？なんでそんなこと言わせるの？

今まで私が見てきた中でも、告白とか…冗談でしちゃいけないよ
うなことはなかったのに。

言われて嬉しくないわけじゃない。だけど、今は悲しさの方が大
きい。

離れたところで男子たちが見ているのが分かる。やっぱり、バツ
ゲームでやらされたことだって分かったから。

そのシヨックは思いのほか、大きくて…

「ねえ、わたしのことからかって、楽しい…？」

「え！そんなことないよ！からかってなんか…」

…うそばかり。それしか私の言いたいことはなかった。

実際に、言ってしまうおうとも思った。それができないのは、まだ
どこかで彼のことを好きだという気持ちが残っているからかもしれ
ない。

あーあ、辛いなあ…

そんなことを考え込んでいたものだから、その声を聞くまで彼の
隣に誰かが来たということも気づくことができなかった。

「あー、はいはい。どうやら彼女には俺らの言ってたことが聞こえ
てなかったようだ」

それは…あのムードメーカーの男子。

わたしの気持ちは崩壊寸前で、しかも今回のこの状況を作った原
因が出てきたことで、突然怒りが沸いていた。

「どうして、こんなことするの…？好きだって思う人にこんなことされたら、辛いんだよ…？」

もうどうにでもなれと思った。「冗談で告白してきたってことは、わたしのことなんか意識してもいないってことなんだろうから。わたしから告白しているってことは気づいたけれど、別にそれもいいやって気持ちだった。

それで、少しでも深刻に考えてくれると思ったら。

「えっ」

「おおっ」

彼らの反応は全然そんなそぶりはなくて、むしろ喜んでいるようにも見えた。

でも…そうだよな。

「からかったのが本当に想われている人なんだもんね。楽しいですようね」

もはや怒りの上に諦めがわたしの気持ちに覆いかぶさっていた。だけど、それでも動じていない。むしろ笑顔でいる。なんで？

そんな中、ムードメーカーの男子が言う。

「はは…いいか、これから言うことは本当のことだからよく聞けよ」「な、なによ…」

もうなに言われても動揺しない。そうわたしは確信できていたのに。

「こいつに出したバツゲームは『好きな女子に告白してこい』だ」

途端に顔が熱くなる。

えっ、それって、もしかして…

「みんな協力してたんだぜ？こうやって女子と話すんだってな！」

「俺らもスリルがあつて楽しかったからOK！」

「全然コクるそぶりも見せないんだもんねー、こうやって後押ししないといつまで経つても平行線のままだからさー」

いつものバツゲームメンバーが一斉にわたしたちのところに来てきては、口々に言いたいことを言っていく。

更に驚いたことは、この時はじめて彼までもがその事実を知ったようだったということだ。

「なっ…みんな、グルだったのか！」

彼がみんなの方を向いて言う。

「みんなサイテー！」

いろんな意味をこめて、わたしは叫んでいた。

「絶対、付き合ったりなんかしないんだから！」

周りの男子がやし立てるけど、気にしない。

しばらく彼なんて口もきかないんだから。

…彼は知らなかったんだから、ちょっとかわいいそうだけどね。

仕方ないから、撤回してあげようかな。

でも彼のうろたえる姿がかわいいから、あと少しだけ。

それは、わたしからのバツゲーム。

(後書き)

この物語は奈宮柚優さんの「バッグゲーム」(N8357G)を読んで、自分だところという展開にするかな…と思い、書いたものです。許可をいただき、載せさせていただきました。ありがとうございます。

あんまり中学生っぽく感じないですね、これ。
もうちょっとはじけたキャラクターにしたかったな…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0388h/>

バツゲーム(MMR Ver.)

2010年10月8日15時17分発行